埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

A Woman-Knight in Cross-Dressing

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-08-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 赤阪, 俊一 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/985

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

異性装から見た男と女(3)── 異性装の女騎士

A Woman-Knight in Cross-Dressing

赤　阪　俊　一
AKASAKA, Shunichi

はじめに

女性が騎士となって活躍する物語は、ここで取り上げる『サイレンス』だけではない。また女性が甲冑をつけて戦場に赴くことも、特異ではない。古くはエレオノール・ダキテーヌがポワティエでヘンリ２世の手勢にとらえられたときには甲冑姿であったと言われているし、ジャンヌ・ダルクが真っ白な甲冑姿で戦場に姿を見せ、アルマニャック派の軍を奮い立たせたのも有名である。この甲冑は王太子シャルルがジャンヌのためにあつらえさせたものである。俗説に、ジャンヌ・ダルクが火刑にされたのは男装をしていたからだと言われるが、もちろんこれは単純化された議論であり、ジャンヌの裁判資料では、そんな単純な議論は展開されてはいない。

女性が甲冑を着して戦場を駆けめぐる物語というのは、ありふれた話ではなかったであろうが、さりとて、きわめて特殊というものでもなかった。数多あるとは言いがたいが、いくつか存在する女騎士の話の中で、この『サイレンス』を取り上げて分析するのは、この中世俗語で書かれた物語が現代語に翻訳されているという、[1] それだけの理由である。我々はこの作品を文学的に鑑賞しようとするのでもなければ、作品の構成を通して、中世文学のありように迫ろうとするのでもない。この作品を通して、中世人のメンタリティー、それも女性に対する男たちの見方を探ろうと考えているので、極端なことを言えば、作品は何を使っても同じだということになる。分析する作品ごとに中世人のメンタリティーが異なっていては困るが、そういうことはあり得ない。もちろん作者が異なり、時代が異なり、書かれた言語が異なれば、そこにさまざまな相違が出てくるのは当たり前である。しかしそうした相違にもかかわらず、大枠で、作者ならびにその読者もしくはその聞き手たちが考え感じていたことは、ある範囲内に収まるはずである。

1　あらすじ

本稿で取り上げる『サイレンス』は中世フランス語で書かれた韻文体の物語であるが、実はさして有名なものではなかったらしい。おそらくいくつかは筆写されたであろうが、現存しているのはわずかにひとつだけであり、それは1911年にあるイギリス貴族の邸宅で見つけられた箱の中にあった。その箱には「無

キーワード：異性装、女騎士、ジェンダー
Key words ：Cross-Dressing, Woman-Knight, Gender

価値な古い書類」と書かれていたそうである。[2]

この物語が最初に活字化され編集されたのは1960年代であり、出版されたのは1972年であった。発見されたときには、この物語にはタイトルがなく、『サイレンス』なるタイトルは、これを編集出版したルイス・ソープがつけたものである。[3] 書かれている中世フランス語は13世紀後半のものであり、作者であるコーンウォールのヘルドリスなる人物についてはまったく知られていない。ヘルドリスが実は女性であったという議論が存在するが、[4] 作者が女性であっても、この物語自体は男性の立場から書かれているので、中世における男たちの女に対するメンタリティーを考察するのにさして大きな障害にはならないと考えられる。

物語の分析をおこなうためには、最低限まずこの物語の簡単な概略を紹介しておかねばならないだろう。

イーヴァンがイングランドを支配していたとき、二人の伯が戦った。双子の娘をめとった二人が相続のことで争ったのだ。これを契機として、イーヴァンは女性による領地の相続を禁止した。

イーヴァンがチェスターからウィンチェスターへと向かっているとき、怪物[5] が出現した。それを退治したイーヴァンの甥、カドールは怪物の毒で死にかける。イーヴァンはコーンウォール伯の娘、ユーフェミーに命じて、カドールの治療に当たらせる。以前よりこの二人は好意を感じており、カドールの病が癒えたときに結婚する。彼らの間に子どもが産まれるが、それは女子であり、相続権がなくなるのを恐れたカドールは男として育てることにした。この子どもはサイレンスと名付られ、森の中で男の子として育てられる。

ある日、二人の吟遊詩人がやって来る。この二人とともに、サイレンスは森を去る。サイレンスが吟遊詩人にさらわれたと思ったカドールは、以後、この国に入る吟遊詩人をすべて追放し、もしとらえたら処刑するように命じた。

サイレンスが吟遊詩人の技に長じ、ブルゴーニュ伯の宮廷で大きな称賛を受けたのを見て、吟遊詩人たちはサイレンスを殺そうと考える。その企みを知ったサイレンスは彼らと別れる。

父や母のことを思い出したサイレンスはコーンウォールへと戻るが、吟遊詩人捕縛の命令があったためとらえられて、カドールのもとへと連行される。サイレンスはそこで右肩についていた生まれつきの星形あざを父親に示し、自分がサイレンスであることを証明する。

その後、サイレンスはイーヴァンの命令で宮廷に出仕することとなる。ところがここで女王、ユーフェームに言い寄られ、それを拒否する。その結果、ユーフェームに報復されて、サイレンスはフランスへと送られることになる。サイレンスにはイーヴァンによるフランス王への手紙が託されるが、ユーフェームは、この手紙を、手紙保持者の首をはねよと書いた手紙と差し替える。それをもってサイレンスはフランス王のもとへと赴いた。三人の伯たちの口添えで助かったサイレンスはフランス王に仕えることになる。17歳になったとき、サイレンスはパリでフランス王によって騎士に叙された。

フランスで名を挙げたサイレンスをイーヴァンはイングランドへと呼び戻す。反乱が生じたためである。イングランドに帰ってき

たサイレンスは伯たちの反乱を鎮圧する。再びサイレンスに言い寄り、またも拒否されたユーフェームは、男にはとらえることが不可能だとされているマーリンをサイレンスにつかまえさせてほしいと王に依頼する。

マーリン探索の旅に出たサイレンスは首尾よくマーリンをとらえることに成功する。宮廷に連行されたマーリンは女王のそばに使える尼僧が男であることを、そしてサイレンスが女であることを暴露する。イーヴァンは女性が相続権から排除されるという王令を撤回し、サイレンスと結婚する。

物語は6000行以上にわたる長いものであるが、細部を無視して、概要だけを語れば以上のようになる。次に、この物語の主人公、サイレンスにかかわる問題を見ておくことにしよう。

2　サイレンス

サイレンスは主人公の名前である。サイレンスは、新約聖書中の、女性は「むしろ静かにしているべきです」[6] という言葉と深い関係にあるだろうとクリューガーはいう。[7] もちろん、パウロのこの語句は踏まえられているだろうが、物語中で繰り返される、女は黙っておくものだという警句[8] は、パウロの影響というよりも、当時の一般的な観念であったと考えるべきだろう。物語中、サイレンスは、聖Patienceの名をとって命名されたとされているし、[9] 沈黙は、心配（ance）を和らげるとされており、[10] ヘルドリスがこの名前を使用したのは、聖書だけに根拠をもつわけではなさそうである。

サイレンスという名前をめぐって、ふたつの問題が浮上する。ひとつは、女性嫌悪者の主張。もうひとつは、ジェンダーにかかわる問題である。まずは女性嫌悪者のほうから取り上げる。なぜ主人公の名前はサイレンスか。ここにはふたつの含意がある。男として育てられた主人公は自分が女であることを何があっても語ってはならないと義務づけられている。もししゃべれば相続財産が消滅するのである。その意味で、主人公はサイレンスであらねばならないのだ。もうひとつは、本当は女であるところの主人公が男として生きることは、不可能であることを生きるという含意である。女性嫌悪者の観念では、女が沈黙を守るのは不可能であり、それゆえ二重の不可能を生きる主人公に象徴的記号としてサイレンスなる名前が与えられているのである。[11]

イーヴァンはユーフェームのおしゃべりを戒め、部屋に戻れと命令する。[12] 部屋とは、社会から隔絶した女性の居場所に他ならない。そこではいくらしゃべっても社会に届かない。つまり女性の部屋では女性は社会に対して絶対的な沈黙を余儀なくされているのである。12歳になったとき、サイレンスに対してNatureが部屋に戻れと命令する[13] のもそういう意味で、つまり社会に対して閉ざされた場所に戻り、沈黙せよとの命令だと理解するべきなのだ。

ユーフェームは沈黙しなければならないのに、沈黙しない。逆に、サイレンスは自分が女であることを語らねばならないのに、沈黙を守る。最後にどちらが勝利するかといえば、サイレンスなのである。つまりサイレンスという名前に託されていることは、一種の定言命令化された、女は沈黙を守るべしという命題なのである。

この物語には、ユーフェームとユーフェミーという二人の女性が登場する。EufemeとEufemieであるから、まことに紛らわしい。

物語中に一カ所、ユーフェームのことをユーフェミーと書いてある部分がある。[14] 作者が間違えたのか、あるいは筆写した人物が間違えたのか、とにかく紛らわしいのである。では、ヘルドリスはこのふたつの名前で一体何を表現したかったのであろうか。もちろんユーフェミーもユーフェームもeuphemismeを念頭に置いて作られた名前であろう。euphemismeは婉曲語法のことである。では、ユーフェミーとユーフェームは何を遠回しに表現しているのか。良き女と悪しき女か、あるいは、理想の女と普通の女のどちらかであろう。物語の最後のほうで作者が顔を出し、ユーフェミーの宮廷登場を述べた２行あとで、「悪しき女を非難するより、良き女を賞賛すべし」[15] と語っているところを見ると、ヘルドリス自身は、ユーフェミーを良き女、ユーフェームを悪しき女と考えているようである。つまりこの物語におけるユーフェミーは良き女であれば、かくあるという女性であるし、ユーフェームは悪しき女であれば、このように行動するというモデルなのである。作者は読者あるいは聞き手の女性に対しユーフェームのようであってはいけないと教訓を垂れているのである。

次に、ジェンダーにかかわる問題を見ておく。本文中で、主人公はSilenceという名前で登場するが、何カ所か、SilentiusあるいはSilentiaという名前が問題となるところがある。[16] 元来、ラテン語で沈黙はsilentiumであり、中性である。それを男性化したのがSilentius、女性化したのがSilentiaである。もちろん、Silentiusと書かれればそれは男であることを意味し、Silentiaと言われれば女であることを意味する。物語の最初で、サイレンスが生まれたとき、父親のカドールは彼女を男として育てる決心をし、Silentiusなる名前を与える。もしばれたときには、語尾のusをaに変えればすむだけだからという理由で、そう決意するのである。単語の性はつまりはジェンダーである。ここに、ジェンダーとセックスの結びつきは恣意的であるとの観念があったことを見て取ることができる。クリューガーによれば、「この物語では、ジェンダーがフィクションであることが示され」、[17] さらにゴーントも「ヘルドリスは生物学的によりもむしろ文化的に決定されている性的相違という見解を肯定的に仮定している」という。[18] しかしながら、ラズリーのように「ヘルドリスの確信は、機会さえ与えられれば、女も男と同じように行動ができるというものだ」[19] とまで主張するなら、それは余りにもヘルドリスに好意的に過ぎるということになろう。

本文中、サイレンスの女性形がScilenciaあるいはScilentiäと綴られているところがある。[20] Scilentiaからl（エル）を取り去ると、Scientia（知恵）となる。では、lとはなにか。もちろんlはelleであり、女性のことを指す。[21] ここには、ひとつの含意がこめられているだろう。サイレンスという女性から、女性性を取り去ると、それは知恵になるということ、つまりサイレンスは女性であるものの、男装して、女性性を捨て去っているので、知恵ある行動が可能であったのだという含意である。作者がここで伝えたかったことは、女性というのは、本来は愚かなのだというメッセージなのである。ただし現実には、サイレンスの母、ユーフェミーは７科に通じ、[22] この国でもっとも賢明な医者であった。[23] サイレンスも勉強好きであったとされている。[24] これは現実であったのだろう。女性がこうした学問をかじっていたとしても、本質的には愚かなのだ

という、ヘルドリスの居直りじみた女性批判が感じられる。

3　ジェンダー

ジェンダーなる章見出しをつけたが、ことあたらしくジェンダー論を展開するつもりはない。ここではセックスとジェンダーというふたつの視点から人を見ることが、すでにして13世紀においておこなわれていることを指摘したいだけである。『サイレンス』の作者であるヘルドリスが極めて先進的な思想をもっていたということをいいたいわけではない。彼はむしろ当時次第に強くなりつつあった女性嫌い[25]の典型的な発想をしている人であった。そういう人物ですら、ジェンダーが社会の産物であり、ジェンダーとセックスの結びつきは恣意的なものだということをこの物語の中で語っているというのが興味深いのである。

ペギー・マックラケンによれば、そもそも異性装の物語はジェンダー・アイデンティティを身体ではなく、その行動へと移すものだという。[26]となると、いかなる行動をとるかというのが、男であるか、女であるかの基準となる。この意味では、物語の中でサイレンスはずっと男なのだ。それゆえサイレンスを呼ぶ代名詞はheなのだ。男であるが故に、戦場でも馬上槍試合でもサイレンスは勇敢である。女にもこれだけのことがやれるのだとはこの物語の中では考えられない。もはやサイレンスは女ではないのだから。サイレンスには女である自分が男より優っていることをなんとか証明しようなどという気持ちは皆無である。サイレンスは女より男が優れていることを知っているのだ。[27]この物語において、サイレンスは男に化けるのではなく、男になっているのである。男であるから、男にできることは何でもできるのである。

従って、この物語では、女が男の恰好をして、男と同様の仕事をするとは、読者によって見られていない。女が男になって、その男が大きな仕事をすると意識されていたのだ。サイレンスを男と規定するから、「女は男を破滅させる」[28]だの、「女の悪さには限りがない」[29]などという言葉とサイレンスの活躍が矛盾なく語られるのだ。

サイレンスの物語が書かれていた羊皮紙の余白にはさまざまな動物や半獣半人が描かれていたという。ピーター・アレンは、このことのゆえに、この物語が当時の人々にとってはファンタジーと考えられていたという。[30]ファンタジーであるが故に、女が男になることが可能なのであった。

しかしながら以上のような大枠をもちながらも、読者はサイレンスが女であることを知っているのである。そうであるが故に、物語の中で、サイレンスは女の特性と思われているものを発揮して、危機を乗り切る。たとえば、吟遊詩人のもとから離れる際、サイレンスを助けてくれるのは夢見と直感なのだが、これは女の特性と考えられているものなのだ。[31]

この物語では、女をめぐっての格言があちらこちらにちりばめられている。そのいくつかを抜き出してみる。まず最初に登場するのが、「女というものは、感情をくるくる変えて、飽きることがない」。[32]ユーフェームが最初にサイレンスを誘惑している場面にさりげなく置かれている。その少し後に、「女というものは、怒りにかられたときには、まったく御しがたい」[33]という文言がある。「女にとっては、何か不実なことを成し遂げたいと思うと

きには、泣くのが常套手段」[34] というのもある。そしてサイレンスの帰国について、イーヴァンとユーフェームが話をしているところで、「不実な女は愛することなどなく、欲望をたきつけるために欺くのみ」[35] というのが登場する。この「女というものは……」形式の女性批判は直接にはユーフェームの行動に対してなされているが、もちろんそれを一般化して、全女性をも対象としての言説であることは、読者には明らかなのだ。こうした文言から「女は不実で、感情的だ」というステレオタイプ化が読みとれる。

逆に男のステレオタイプ化はどのような視点でなされているであろうか。「男というものは、できるなら、自らの名誉を救うため、何らかの方法を考えるべく最善のことをなすべし」。[36] あるいは、「生涯を名誉のために費やした男が、それを下らないもののために投げ捨てるなど、誤りだ」[37] というのもある。男の人生の最終目的は名誉だというのだ。これは別に珍しくはない。しかし男と女の両方を取り上げているものでは、男に対する見方が少し変わってくる。例えば、「女が隠し立てをし、だましてやろうと思っているとき、どんな男が女に対抗できるだろうか」。[38] あるいはこういうのもある。「賢明な男の理性は、だましてやろうとする女に対して、ほとんど何ごともなしあたわない。」[39] ここに見られるのは、中世においてかくあるべしだと想像されるような男性像ではないことに気づかされる。

一般的に中世の物語における男性は右顧左眄せず、まっしぐらに名誉のために戦う。しかし、ヘルドリスの男性像はそうではない。どうもなよなよしたイメージになるのである。一般的に想像されるような「男らしさ」を備えているのはサイレンスの父、カドールだけである。それに比べ、女のイメージははっきりしている。女はいかなる手段を使っても意志を通すのである。ユーフェームとユーフェミーの描き方にしても、悪女ではあっても、自らの意志を断固としてつらぬくユーフェームのほうが、くっきりした輪郭で描かれている。この物語が、男に向かってではなく、女に向かって書かれたのではないかと想像されるゆえんである。

さて、サイレンスが男として生きざるを得ないのは、サイレンスの意志ではない。父親であったカドールの意志であり、イーヴァンによる恣意的な、当時の人の目から見れば、非条理な、女性による相続禁止令の故であった。サイレンス自身が男装を欲したわけではなく、強いられたという点では、異性装の女性聖者や女教皇とは異なっている。つまりサイレンスの男装は男の目から見て許容できるのである。あるいはそもそもこの物語自体がファンタジー、つまり女性聖者等のストーリーとはちがって、現実にはあり得ないものと考えられていたのである。しかし、ではファンタジーであるということで、女が男になることは成功するのか。物語中、サイレンスには欠けているものがある（＝一物がない）、従って、男にはなり得ないという述懐がある。[40] ここでは男であることは、身体的に規定されていると考えられているのである。つまり、身体的に女である限り、サイレンスの試みは失敗することが示唆されているのである。異性装の女性聖者同様、最後に、サイレンスは男たちに裸体をさらさなければならなくなる。[41] サイレンスは女として、男の客体でしかないということだったのであり、この点ではこの物語における男と女の関係は女性聖者や女

教皇の場合と同様であった。

4　マーリン

アーサー王の物語に登場する魔術師マーリンが、この物語にも登場する。マーリンの話は単なる挿話に見えるのだが、そうではない。この物語全体の構造を集約的に示しているのである。その構造を図式化すれば、野蛮（混乱）から文明（秩序）へ、ということになる。そもそもサイレンスが男装し、男として行動するのは混乱以外の何ものでもない。このような状態はあってはならないのだ。しかしこのような状態にならざるを得なかったのは、サイレンスの罪ではなく、イーヴァンの命令が不条理であったからである。つまり、混乱は王国の混乱なのであった。そしてマーリンがイーヴァンのもとに連れてこられたとき、彼が笑い飛ばしたのは、実はこの王国の混乱であった。この王国の混乱の実態がトリックスターたるマーリンによって解き明かされ、最終的に最大の混乱である、女である男と男である女の存在が暴露され、王国の秩序が回復されるのである。秩序回復後、ヒロインたるサイレンスはヒーローたるイーヴァンと結婚せざるを得ないし、女装していた男は存在を抹殺されなければならない。

このマーリンが人間社会にかかわるようになるのは、もちろん普通の人間によっては不可能なのだ。男である女という、いわば人間社会からのはみ出しものによってのみ、マーリンは人間社会にと連れ戻され得るのだ。

さて、マーリンを探索する旅に出たサイレンスはさまようこと半年足らずで、ある老人に出会う。老人によるとマーリンは体中を毛で覆われ、草と木の根を食物として生きている。つまりこの時点では、マーリンは獣と同じ存在なのである。その老人にマーリンをとらえるべき方法について教えてもらい、サイレンスはようやくマーリン捕獲に成功する。

マーリンをおびき寄せるためにサイレンスは食物の準備をするが、その内容が重要である。肉と蜂蜜、牛乳、そして最後にワインである。この最初に使われる肉と蜂蜜は、両方とも、動物が消費するものであり、野蛮な状態にいるマーリンを呼び寄せる食物なのである。牛乳はより人間的になった食物といえる。というのも、まだ幼い牛＝半動物しかこの食物を摂取しないが、人間は大人でも牛乳を飲むからである。そして最後のワインは、マーリンを文明へと誘う。というのも、ワインは自然に生ずるものではなく、人間によって作られねばならないからである。[42]

町へと連行されたマーリンは農夫や司祭などを見て笑いころげる。このマーリンの笑いは人間世界の秩序を笑い飛ばしているのではなく、秩序の壊乱を笑っているのであり、シャロン・キノシタによると、ヒエラルキーを再構築するものだという。[43] サイレンスの男装により失われていたヒエラルキーがマーリンによって笑いの対象とされ、やがて秩序が回復されることを予想させてくれるのである。

もうひとつ、いままで男の役割を演じてきたサイレンスがマーリンを誘い出すときにいたって初めて伝統的な女の役割である食物の準備をおこなうことも重要である。[44] サイレンスがやがて女としてのジェンダー・アイデンティティを獲得するようになるための伏線がここに張られているからである。

この物語は結末として、国王による妻の処刑とサイレンスとの結婚をおく。ある男が恣意的にある女と結婚し、元の妻を処刑するこ

とを描くことによって、ヘルドリスが表現したかったのは、国王権力の絶対性だけではないだろう。ジェンダーというディスコースにおける男の権力をも描きたかったに違いないという、クリューガーの推測[45]に筆者も同意する。

5　封建制

この物語を封建制という秩序の問題から見ることにする。まず二人の騎士の争いに対して、誰も解決策を見出し得なかったというところで、封建的秩序がすでに崩壊しかかっていることが示唆されている。[46]その後、イーヴァンが女性の相続を認めないという王令を発する。この叙述によって政治秩序の最終的権威が王にあることが表明されているのだ。封建制下では、このような相続の問題が一片の王令で変えられることはない。

シャロン・キノシタは「封建的な相続に対するイーヴァンの命令の中に暗黙のうちに含まれる教訓は、陪臣は軍事的な強さによってではなく、生物としての再生産によって封土の完全性を維持しなければならないというものであった」[47]という。サイレンスとほぼ同じ時代にドイツで書かれた白鳥の騎士の物語では、封土を守るのは強さだとの観念が打ち出されている。[48]同時期に相異なった観念が混在していたということか、あるいはフランスとドイツで異なっていたのか。考える価値がある問題だが、ここではその余裕がない。

さてサイレンスの父、カドールはイーヴァンの甥であり、物語中ではイーヴァンに子どもがいないので、有力な王位継承者ということになる。カドールがコーンウォールの領主の娘、ユーフェミーと結ばれるのは、物語中では大恋愛の末だということになっているが、ユーフェミーは一人娘なので、[49]この結果、コーンウォールはカドールのものとなり、[50]やがては王領に組み込まれるはずである。そう考えれば、この物語はきわめて政治的なものとなる。

ユーフェミーとカドールが結婚するときの状況は次のように記される。まず王が許し、コーンウォール伯が同意する。つまり、自分の夫を選ぶことを許す点において、王が家族に対するユーフェミーの父親の権威を簒奪している、言い換えれば、コーンウォール伯の封建的特権を犠牲にしていることになるのだ。[51]このような国王の権力のありようは、サイレンスの結婚のときも同様である。彼らの結婚は王の顧問官の助言により決定され、それからのち、サイレンスの両親に知らされるのだ。国王宮廷にサイレンスが出仕するときも、まず国王の命令があり、カドールの意志に反して、サイレンスは国王の家臣となるのだ。[52]

物語の結末でサイレンスはコーンウォール領有を認められ、次いでイーヴァンの妃になるわけだから、コーンウォールは最終的にはイーヴァンのものになると読者は予想する。この物語は最初から最後まで、王による中央集権化の試みの話と読まれることも可能なのだ。

サイレンスとイーヴァンの結婚は明らかに教会法に違反している。ラテラノ公会議で４親等以内の結婚が禁じられたのは1215年だから、おそらく当時はすでに多くの人がそのことを知っていただろう。さらに読者はイーヴァンとサイレンスが血縁関係にあることを物語中で二度も告げられるのだ。[53]サイレンスはイーヴァンの甥の娘だから、４親等以内である。にもかかわらず結婚するのはもちろ

ん領土的な問題である。教会と争っても王権のもとに国土を集権化するという固い決意の表現なのであり、それを読者たちにさりげなく訴えているのである。つまりこの物語は封建的秩序から絶対王政への過渡期の初期的状況を、王権の側に立って人々を納得させようとしたものなのである。その視点から見ると、この物語における、最終的な勝利者はサイレンスではなく、イーヴァンである。コーンウォールの将来の領主たるサイレンスは男にもなれず、自分の領土を自分で裁量することもできない敗北者なのである。この物語は、サイレンスを政治的な敗北者として印象づけることによって、女が男になろうとすること、あるいは女が男と肩を並べようとすることは最終的に失敗することをも読者に納得させようとしているわけである。

6 Nature（=生まれ）と Noreture（=Nurture, 育ち）

この物語では、Natureがいわば狂言回しの役割を演じており、節目で登場してはいろいろと意見を言う。Natureといえば、アラン・ド・リールの『自然の嘆き』[54]や『薔薇物語』[55]が思い出されるが、アラン・ド・リールやジャン・ド・マンのNatureとヘルドリスのNatureは、その主張においてかなり異なっている。アランやジャンは、読者がギリシア神話中のさまざまな逸話を知っているものとの前提で議論を進めている。議論が高尚なのである。それに対し、サイレンスのNatureはいかにも生活密着型である。何よりもNatureとNoretureの対話という形式自体、『自然の嘆き』や『薔薇物語』とはまったく異質の形式である。物語中に「『育ち』の力は、『自然』の力に勝ると証明されるだろう」[56]というような言い回しがあることから判断して、もしかしたら、ヘルドリスは当時の格言であった「生まれは育ちに勝る」[57]に着想を得たのかもしれない。アランやジャンの文脈で、ヘルドリスのNatureを解釈するのは危険だろう。

ペギー・マックラキンは「NatureとNoretureの論争は身体と行動の関係についての議論に構造化されている」[58]という。クリューガーは、「NatureとNoretureの対立は、セックスとジェンダーの対立ではなく、ジェンダーのふたつのモデルが対立し合っている」[59]という。二人の見解は、矛盾するようであるが、そうではない。たとえば、Natureはサイレンスに女性の服を着せ、女性として行動するよう欲する。しかし一方では、男の服を着れば男だというNoretureの主張に対し、外見は真実を含まないという。[60]一見、矛盾するこの主張の中に、Natureの真実がある。つまり外見をどのようにつくろおうとも女は女であり、女である限り、女としての行動をおこなわなければならないのだというのだ。では、女としての行動とは何かというと、伝統的に女の衣服とされてきたものを着、女の仕事とされていたことをすることなのである。その意味では、Natureは文化なのだ。

さてNatureは文化だといった。そうであるがゆえに、Natureは12歳＝思春期になったサイレンスに呼びかけるのだ。[61]当時の観念では、子どもは文化にはかかわらないと考えられていた。ドイツ語では子どもは中性形であるが、これは、まさにそうした観念、つまり子どもは文化＝ジェンダーにはかかわらないという観念がずっと古くからあったことを意味している。多くの場所で見られる通過儀礼は社会や文化に子どもが参与できる状態へと子どもを移行させる儀礼であると見なされて

いるが、中世における成人式もこうした役割を担ったと考えてもいいだろう。

さらにサイレンスが「森で育てられた」[62]とされており、マーリンが「森で生活していた」[63]とされていることも重要だ。当時、森は秩序のアンチテーゼとして認識されており、我々の言い方からすれば、文化の対極にあるものであった。この物語は秩序からはみ出ていたサイレンスやマーリンがやがて秩序へと回帰することをテーマにしており、サイレンスに関しては騎士から女王へと変わることと密接に関連している。そしてそれこそがNatureへの回帰であったとヘルドリスは考えたのだ。マーリンの「自然の場」は文明＝秩序であるし、サイレンスの「自然の場」は女であることなのであった。[64]

もう一度、12歳になったサイレンスにNatureが呼びかけたことに戻ろう。Natureは、サイレンスの仕事は森の中をうろつきまわったり、馬上槍試合をしたり、狩りをしたり、矢を射たりすることではないのだから、[65]部屋に戻って、縫うことを学べ[66]と命じる。命じられたサイレンスは、それに従おうとする。そのときいままで使用されていたheという代名詞が突然sheに変えられる。[67]ところがそこにNoretureがやってくる。そのとたんに、代名詞は再びherからhimに変わる。[68] Noretureに対してサイレンスは女の子として生きたいと切々と訴える。[69]さらにたまたま服を脱ぐようなことがあったら、女であることがばれてしまうという心配を吐露する。[70]

これを聞いて、Noretureは激怒する。NoretureはNatureに文句をいうのだ。自分の養育の邪魔をするなと。[71]そしてNatureを追い払う。そのとき、Reasonが姿を見せ、女性の慣習について考えるよう、サイレンスを促す。彼女があらゆる女性の慣習について考えてみたところ、「男の生活は女の生活よりはるかにましだ」[72]とわかるのである。そして自分の身体がすでに男性化しているという身体上の理由で、[73]男のままでいることを選ぶのである。さらに男として生きてゆく理由として、高い地位を失いたくない、[74]父親を嘘つきにはしたくない[75]ことを挙げ、Natureが何をしようと、秘密を漏らさない[76]と決意するのである。このようにNature対Noretureの第一ラウンドはNoretureが勝利した。

次にNoretureが登場してくるのは、フランスの宮廷で、サイレンスが騎士として成功したときのことである。[77]ここでは教育の力が氏素性に勝ると高らかに宣言されているように見える。本当にそうか。一般的にNatureを通して描かれるのは厳しい身分制の現実である。良き生まれの人はどのように育てられようとも、その高貴な生まれはやがては顕在化してくるはずだというのが、その思考の根底にある。教育の力、あるいは環境による影響など、まったく認めないのである。しかしこの物語においては、サイレンスが男として成功した理由として、教育が重視されているように見える。しかしながらこの物語においても、Noretureが成功したのは、Natureがサイレンスをそのような素質があるようにつくったからだという論理が奥にかくされている。そしてこの論理は両者の最後の論争で明らかになる。さらにもう一点指摘しておきたいのは、悪くなるときである。生まれたときには高貴であっても、悪くなる場合がある。これはもちろんNoretureのせいなのである。[78]この点では、Natureの主張は一種のダブルスタンダードなのである。

最後にNoretureが登場するのは、サイレン

スがマーリンをとらえるときである。[79] 今回は、どちらが人間を堕落させているかを両方が論争する。アダムを創ったのは神であり、アダムは本性としては善である。彼が悪をなしたのはもちろん悪魔と結託したNoretureのせいだとNatureは非難する。[80] 最終的に、Noretureは敗北し、姿を消してしまう。[81] サイレンスの女性復帰がここで予想されるのである。

ヘルドリスは、物語中、「男の服の下は女」という文言を何度かつかっている。また、「自分のnatureを否定するために衣服を着る」[82] などともいう。ヘルドリスにとって、Natureは本質であり、真実であった。そして教育によっても、その本質は決して変えることができないと、ヘルドリスは考えていたのである。

結論

当時の人々にとって、騎士とは男らしさの象徴であった。そして戦いの場における強さは男としての自己確認でもあった。その騎士に女性が扮し、さらに他の男たちを凌駕する活躍をするというのがこの『サイレンス』という物語の骨子である。この物語の中には、「女というものは……」というかたちでのセクシズムが全編にわたって流れているが、女も教育次第で、知力のみならず、体力においても、男に勝りうることを、可能性として示したという点では、女性にひとつの希望を与えたかもしれない。物語の最後でサイレンスを既知の枠組みへと戻さざるを得なかったヘルドリスが女の反発を予想したのは、セクシストであったからこそ、女によって男が打ち負かされる可能性があることを知っていたのだろう。いやむしろそうした可能性があることを知っていたからこそ、彼はセクシストに成らざるを得なかったというべきか。

ヘルドリスはなにゆえ男装の女性騎士という主人公を作らねばならなかったのか。もちろん読者や聞き手の興味を引くと考えたからなのだが、では、なにゆえ、興味を引けると考えたのか。読者や聞き手へのヘルドリスの呼びかけを見れば、彼が現実の女性たちの思考をかなり明確に把握していたように思われる。つまりこの物語は、女の願望を物語化したのではないかとも思えるのだ。男の方が女よりいいというサイレンスによる述懐は、男のほうが勝っているというよりも、現実においては、男のほうが女よりも高い地位にあるという認識を示したものだろう。ヘルドリスの周辺にいた女性も同様の認識をもっていたのであろう。そのような女性に対して、一種の夢を紡ぎだしたのが、この物語であったのではなかろうか。では、夢であったなら、なぜ男装させねばならなかったのであろうか。女が女のままではなぜ活躍できなかったのか。おそらくこれがこの時代の限界だったのだろう。社会的な活躍の場は男にしかなかったのである。それゆえ男になるしかなかったのだ。女の場は、「部屋」であり、そこは本文中でも述べたように、社会とは隔絶した世界だったのだ。

注

1　現在、筆者が手許に持っている翻訳は、Regina Psaki, Heldris de Cornuälle. *Le Roman de Silence*, Garland Publishing, 1991 と Sarah Roche-Mahdi, *Silence—A Thirteenth-Century French Romance*, Michigan State University Press, 1992の二種類である。

2　Sarah Roche-Mahdi, p.xi.

3　Simon Gaunt, “The Significance of Silence,” *Paragraph* 13(1990), p.214, note 1.

4　Kathleen J. Brahney, “When Silence was Golden: Female Personae in the Roman de Silence,” *The Spirit of the Court : Selected Proceedings of the Fourth Congress of the International Courtly Literature Society*, Toronto 1983, edited by Glyn S. Burgess and Robert A. Taylor, p.61.

Suzanne Conklin Akbari, “Nature's Forge Recast in the Roman de Silence.” *Literary Aspects of Courtly Culture : Selected Papers from the Seventh Triennial Congress of the Internatinal Courtly Literature Society*, Woodbridgte, Suffolk; Rochester, N.Y.; D.S. Brewer, 1994, edited by Donald Maddox and Sara Sturm-Maddox, p.45.

5　この怪物、英訳では、dragonとなっているが、原文では、serpent。

6　第一テモテ2: 12-13。

7　Roberta L. Krueger, “Women Readers and the Politics of Gender in Le Roman de Silence,” *Women Readers and the Ideology of Gender in Old French Verse Romance*, Cambridge University Press, 1993, p.103.

8　例えば、6398行。（以下、『サイレンス』については、行数のみを記す。）

9　2067-8行。

10　2069行。「心配」は中世フランス語で、anceであり、それとラテン語のsin（=without）との結びつきが連想されていたのではなかろうか。つまり、「憂いなし」である。

11　ラスリ（Anita Benaim Lasry, “The Ideal Heroine in Medieval Romances : A Quest for a Paradigm,” *Kentucky Romance Quarterly* 32,1985, p.227）は、沈黙とは、女が有してはいなかった伝統的な徳のひとつと見なされていたことを重視し、ヘルドリスは、サイレンスを、普通の女が有してはいなかった徳の鏡として造形したと考える。つまりサイレンスは理想なのであり、現実にはあり得ない女性であった。

12　Krueger, *Women*, pp.106-107.

13　2528行。

14　5206行。

15　6685-86行。

16　登場する箇所については、Sarah, p.330.

17　Roberta L, Krueger, “Beyond Debate : Gender in Play in Old French Courtly Fiction,” *Gender in Debate from the Early Middle Ages to the Renaissace*, Parlgrave, 2002, edited by Thelma S. Fenster and Clare A. Lees, p.90.

18　Gaunt, p.209.

19　Lasry, p.231.

20　2078, 6668行.

21　Kate Mason Cooper, “Elle and L : Sexualized Textuality in Le Roman de Silence” *Romance Notes* 25 (1985), p.359.

22　402行。

23　594行。

24　2383行。

25　Brahney, p.52.

26　Peggy McCracken, “The Boy who was a Girl ; Reading Gender in the Roman de Silence,” *The Romanic Review*, 85 (1994), p.517.

27　2637-38行。

28　5015行。

29　6560行。

30　Peter L.Allen, “The Ambiguity of Silence, Gender, Writing, and Le Romance de Silence,” *Sign, Sentence, Discourse : Language in Medieval Thought and Literatur*e, Syracuse University Press, 1989, edited by Julian N Wasserman and Lois Rone, p.102.

31　Lasry, p.229. ちなみにサイレンスは女であることの技を磨くために、吟遊詩人と旅に出る。吟遊詩人はブロック（R. Howard Bloch, “Silence and Holes : The Roman de Silence and the Art of the Trouvere,” *Yale French Studies* 70, 1986, p.90.）によれば、沈黙をおしゃべりで満たそうとする者たちであり、それゆえに、サイレンスはおしゃべりを学ぶ旅に出たのだ。つまり、女になるための旅だということになる。

32　3901-2行。

33　3918-9行。
34　4157-8行。
35　5239-40行。
36　4199-201行。
37　4864-6行。
38　5001-2行。
39　5005-6行。
40　2477行。
41　6572行。
42　Akbari, p.44.
43　Sharon Kinoshita, “Heldris de Cornuälle’s Roman de Silence and the Feudal Politics of Lineage,” *PMLA*110 (1995), p.425.
44　ヘルドリスは子どもを産むことと食べ物をつくることを等しいものと見ていた。つまりかれによればどちらもNatureの仕事だった。Akbari, 43.
45　Krueger, *Beyond*. p.90.
46　Kinoshita, p.400.
47　Kinoshita, p.402.
48　「白鳥の騎士」『コンラート作品選』郁文堂、1984年。
49　399行。
50　1450行。
51　Kinoshita, p.401.
52　2685-7行。
53　3807,3943行。
54　Alan of Lille, *Plaint of Nature*, Pontifical Institute of Medieval Studies (Toronto), 1980.
55　ギョーム・ド・ロリス、ジャン・ド・マン作　篠田勝英訳　『薔薇物語』平凡社　1996年。
56　2294,2295行。
57　ちなみに、16世紀にはNourriture passe Nature. という言い回しに変わっていくという。Akbari, p.41.
58　McCracken, p.530.
59　Krueger, *Women*, p.117.
60　2275行。
61　2523-29行。
62　2354行。
63　6003行。
64　Akbari, p.44.
65　2526-6行。
66　2528行。
67　2539行。
68　2549行。
69　2551-62行。
70　2571-2行。
71　2593行。
72　2637-8行。
73　2646-7行。
74　2651行。
75　2653行。
76　2655-6行。
77　5145行目以後。
78　2325-6行。
79　5987行以下。
80　6066-7行。
81　6088-9行。
82　2360行。